ル 4
3084

大和廻

京より吉野へ往来の路をしるし玉ふより宇治の波をこえ奈良の名所の京より先奈良へ行それより郡山へ出吉野へ行帰に又奈良を通笠置へより京まてかへる道すちをしるす

京五条大橋

東福寺　五条橋より十三町　東福寺の南

故横山有策氏
昭和四年五月
寄贈

ル4
3084

3084

六子堂のおま石橋なり此所にて京
兆平知盛是より東ハ伏見西国の下也
稲荷京橋あり是にて十一町古瀬川
橋あと筋違橋とも云
伏見苅柱　伏見の城址山上にあり址
西山と山下甚廣し山下桃山本多
豊後ハ東鉄をさハむ
豊後橋　秀吉公の時豊後の國主大友

氏をして此橋をかけられし故かけ
てる音ハさたなくして京にへ行は宇治
を通りてありしなり秀吉公おくて堤
をつけ此橋をかけさせ此處をさ
あふ大京橋より二里京札の辻より
伏見へ京橋まて三里豊後橋へハ三里京
かをし向島ハ豊後橋を越て西南
也豊臣太閤伏見在城の時向島まて源

君の江宅ありて御城今はおまつり地
りハ沼也

巨椋の茶屋　実成橋より五十町あり
三方小倉堤なり堤のうへに民家二軒
ある皆槇嶋より伏見への店也巨椋の入江
のおもてに茶屋あり名所なり

新田村　里人かくて新田と云町あし
淀領也

狼茶屋
久世の茶屋　九宮治橋の西より山道へまで
て皆久世郡也

長池　久世郡より三里なつと茶店
なり村人の宿駅也町の中に長池の名とて
昔池の辺りに堤あり今九町も古の池の
跡也と云ば里に南地と多く山城
南地とて名所也又山城大根とて大

薬園あり此里ハ西南に登せと云里
地黄紫蘇薄荷荊芥白芷等をうゑ
て作れり又ところ〳〵に枇杷庄川下に
もつしろと云所にも茶菓を多くうゆ
ると云長池より田原の郷にゆく道あり
又玉水よりもゆく長池より田原郷口の谷
郷の口と云所へ二里半あまり田原ハ山
中にありて深幽なる里なり十六村あり

郷の口に町あり家人多し是より宮町を
紫香楽宮と又宮浩ともいふ当郷の口より
鷲峰山へ二里半麓を大石と云そ
れより鷲峰山まで二十町ほど高山也
山上に弥勒堂あり僧舎五坊あり白鳳四年
役行者初て開なり真言宗也山上より
近國よく見えて佳景なり田原ハ綴喜の
郡にして鷲峰山ハ相楽郡和束の堺に

属せり和束を田原のかくれところ
なり是より大村山中にあり蛍谷の
方にちかし宇治より田原にゆけハ
栗子山國見たうげなどをすぐる宮
居ハふかきがけにて路せばくあやうき
所なり宇治より三里にちかし田原と云
所大和にも河内にもありて生駒山の南
にありまぎらはしとて郷に山所を

宇治田原と云宇治にちかけれハなり
玉水　綴喜郡なり長池より又十町ほど
所着ハ人家なし金堂ちかき里也井
手の玉水なしとて所の名町を玉水と
云今ハ高綴也玉水ハ町の末の入口也
北方京よりゆけハ左の町はつれに
高宮氏又長三四間なる石垣ありて
岸の下に涌田ありて堂中にありしさ

云是ひがうすまり侍るべからず又町のかた
へ只此所の方なる尼の前より、も井手
又是を玉水と云人あれとひが事也
玉の井八町より長原ちりゆけハたれ
方二町ばかりひがしへ山のしたに玉井あ
とて律宗の寺ありて佛堂のおく
にさく浅き井あり水もきよし出川右のかた
ある玉の井是なり玉水と玉井とハ別

ある井是也讃文にも若ハとの玉水此町より通
それたゞちにて此方の名と云字井手良にゆく
大たへよりと云玉川ハ玉水の町をなかれ方
にゆく里の出口にあり東より西へ流るゝ小
川なり玉水玉の井玉川此所に玉の字をつけ
る名所三ケ所井是也里ハ玉井のほとり方
それ居のとまり里也天神の社あり井手の大
臣諸兄公此舊宅ハ此里の東に家ありと云

ちかき西三町伴山の麓ニ在大塚南大塚と
云田間ニ泉有築山此所今少くおもり又
岩の松中嶋有と云田地の字ニさと云井手の
山崩ハさしおく此谷を砦と云西ニなりと云所
ハひとへ也此所ニ移し住去ハ柘ありと云つりさ
れとも玉川ニも玉井有も玉水有も皆山崩を
まぬかれも一西ニハくさるへからん此里ニまへ
て昔ハ山崩おほくありしニや今ハつんとへ井

多此蛙ハふるの原ふ閑浦とりよ云又ニなり
さのつとも又一西よりきこへけれ此所の堀乃
あらにかなりてをなくありしと云山
中より所よりおりしるき声してなくる河
おもてハさしもきこえ此所の堀多く鳴き西よ
此蛙をむとうそまてハ泉蛙なきさむしとつたへ
藪の渡　東ありとしきより本陣へハ坂と西
よ北より川を越ましハ飛鳥山へ行たる也堤のと波

場にある民家を菅井村と云下狛村の北
村也是より二町ばかり東に光明山の鳥居の
跡あり治承の乱に高倉の宮薨御の地也
光明山の寺跡はかたはら村の上に残りたる山の
東側にあり皆ハ大ちなきしと云菅井より
社もあるしとや
祝園 是より一里ばかり茶屋あり綺に到る
此里の入口左に祝社あり石燈籠の身に紀氏明

祝園と成りしなるべし森林の中に生日の神の
社あり大社也いにしへ合戦の陣りとありて是成たる地也
吐師 祝園より一里ばかり茶屋あり綺に到れ
是より十町にして山城大和の境あり木津
松より南に津をこえて奈良へいたる
歌姫 吐師より二里半是より大和の内也是大和
路ここのとは左ハ奈良にて右ハ奈良より若
の大路也中は左ハ歌姫より若狭の通路也

下つ道ハ今の大道也玉林抄にいはく
○神功皇后の山陵ハ姫の町より坤の方
大町許にあり邑人山陵山と称し又大塚と
云小山也老松繁茂り延喜式に狭
城盾列の池上陵なりまたこの町の
北の方よりのかゝる故なり又石塚とて神功
皇后の陵此西にあり陵の南に松かえ生
よりて南に有りさゞき村と云

里老曰山陵山ハ神功皇后の山陵也石塚ハ
いつもの帝と云事をまちかひたと云延喜式に
成務天皇の陵ハ大和の狭城の盾列の
池後陵のうへにあり是成務の山陵ゑ人
しを代なる内紀に歌山と称し給ひし
此里人石塚まで石をとりて石棺
掘あてけり棺を開て見れハ太刀短刀鏡
などありしをおかうて奉行なる氏に告

なる氏てらは陵ならぬものをそうものごとく
土を穿まへしと命ぜられ初て石棺を開
ら見ハたりとぞ欠しくまつりしとも
云は此ふ是徳ヲ皇の陵なり
越界ゆる　奈良へ一里余紀伊郡なる平城帝
の御子高岳親王の創建てし其の法井戸
并寺あり云大にかくて有る荒廃し今ハ
里は存とられり

三条村　紀伊郡にて今は里の名に平城
の旧跡なりと云ふ八町ばかり西園の字に九条の名
内裏の跡にはかりの今も田をつくらは
秋篠　名所なり西大寺の北也是より奥福ちへ
一里なり光仁帝の創建秋篠寺あり
其寺の薬師あり今も京の山伏往して三宝院
に属す
外山の里　秋篠の西なり紅葉の楓を

西大寺 奥嶋ちと一里はかりなる所の西の町に在孝謙
天皇の勅願にて天平勝宝元年より天平神護
元年まて十七年を経て創立ありぬ故に称
徳天皇の御建立にて孝謙帝と申せし重祚して称
徳と称しけるなれは此寺を建立あるといへとも今なる所
三百石領く叡尊僧正の西大寺の中興にして御朱よ
めうかうさみとり名なりとて白毛と申ます
ぬける寺の称々古て茶を見てる山称ハる

此寺よりたし云ひ寺々かる多し毎年とやら丹てある
菅原 菅原寺の西大寺の東也ここに神の社あり小也菅ハ
の先祖は菅原氏にてましき所こ天皇の御菅を以て姓とした菅
原なるよ宝来 垂仁天皇の御陵ある菅の世ハ
いこま 山の辺 造也宮ある行基僧正の御菴あり
遷化せられしより東大寺へ一里ちいさき池に
安康天皇の陵ちか 姫塚又ハ清瀬奥儀
おもりといへり

伏見の里　菅原村の東にあり又東也たと
垂仁天皇の御世ハ伊勢ゑん菅原や伏見のさとれ
あれはてもなし又千載集後拾遺の谷のうたとふく
物そのかなしき菅原や伏見の里の秋の夕暮さへ高
よ川田といふ里あり稲と多く晒を取也

蓬莱村　菅原村の東也田の中に大なる塚あるを
上に綺ぞ云て垂仁帝の陵子新田部親王の墳也
此東に蓬莱の名山とて是相成りとふ小山田ありよ

大なる池あり是て子の池陵ならん それ古名を知人
なし日本紀を考ふるに垂仁天皇を菅原の伏見
の陵に葬るとあり延喜式に八菅原伏見東
陵垂仁天皇西陵安康天皇と有りさ山陵の側
よりくらがり嶺へり大坂へ通るたあり

招提寺　菅原の東也是より西大寺へ二十丁大町也
寺内広く法を支し楼門に唐招提寺と額
あり孝謙天皇の御宇也とぞ当寺を全き

云なる丈六の釈迦也後を講堂と云なる
丈六の弥勒也元亨釈書によれバ講堂ハ奈良の朝
集殿を捨てしとあり釈迦弥勒共ニ鑑真和尚
の弟子唐僧思託律師の作也又鑑真ハ南山
寺にて戒壇を又醍醐にと云并に又唐僧の
大僧都に任ず此寺ハ律宗の本寺也凡此る律宗の
第にて律宗を始天平宝字三年創建の世
よりも此る大仏殿や天保元年まで九百
三十年よ過て今ひとして一度も未だ上せれ
作りなるべき也世に梵刹の京代の梵刹
なり今此の二百五附けるの事元亨釈書
二十八年まてよみて豊年多くし
西の京空鐘て宮をはじめの仏は此地よまし併ける
此寺院にしらの京の北と云薬師寺也
ち此の二百五薬師寺大也ち内廣し伽藍よ
是寺併ハ南殿の大塔所併也并にあり

一里ほど大寺なる六字の境にて茶師あるの南也
傍に塚あり八幡宮をまつる霊也
柏木社(かしハのもり) かしハ木村の西に小林あり是柏木社の森
也 奈良の西南也 京の茶屋といふて東に出て八
左の方にある大の字の方八辰(たつ)の市有り
辰(たつ)の市 柏木の東南にあり京也
大安寺(ひがし) 辰の市は小也 奈良より未申の方にある
八古寺とて大寺也 一まして南大寺といふ今は八ちぶ絶(たへ)て

小菴ありしよりおよそ八幡の左にある
の法也
法華寺(ほつけじ) 奈良の西小半里にあり律宗の尼(アマ)
寺なり 孝謙(かうけん)天皇天平勝宝元年中光明皇
后此創立(さうりう)也 是淡海公(たんかい)の旧宅(きうたく)此地也 又浴室
もろこしへ 東の門およそ浴(よく)室に入たりし妻(つま)横(よこ)佐の
甚しき地にて死せりといふ 法華寺の尼垣土(ゑんど)
といふ小さきこまいぬを作りてうる名物也

海龍王寺 法華寺のならびに也 律宗也 天平十三年
光明皇后の建立 又曰玄昉僧正創立とも云
大寺なり
不退寺 京大寺より十丁許西北也 在原業
平朝臣創之 平城天皇の皇統をつぎし其のあと也
といへり 業平自画の影 又陽成院宸翰の
勅額あり 右在中将は在京邸宅 業平卒して後
平城天皇之孫 阿保親王之五男也 又業平の寺

天平勝宝廿八日行年八十六にて卒す 其業
平の三とせ大和八月まで めでし是もの つ
それハ人の光とかゝりぬ
眉間寺 奈良坂の内也 其陵の西北七八町よ
在律宗也 聖武帝御建立也 ちなみ百石許 天皇
聖武帝御陵の側に在り 又光明皇后の陵も
ありさりあのつき東南に山に多門の城址あり 松永
弾正住せし所也 又此城の宮方子長慶と作り

つて称しと云今長屋を作りて女門跡らと称
するハ是より始まれり是より十町余り山
中に元正天皇の御陵あり

佐保川　南都若草子東大寺と般若寺との
間より落ていつり轉害町北の般若寺の下に
橋ありて山川也大和物語に曰今新在家町北
石橋是也水上ハ春日山より出て為八間別當の
東の林本を流れゆく或般若寺坂の北也川を

さほの川と云ハ誤也

雲井坂・東の橋これハ小坂なれど是也東大寺八景の一也

轟の橋　興福寺の東北隅の途中にあり板橋の
下に一尺ほどの許なる溝の流れ也わつかの水なり
又東大寺八景の一也

興福寺　日本第一の大伽藍也法相宗也元明天皇
和銅三年淡海公不比等創立境内方四町諸
堂建て境内にある南ハ南に向つて南大門の

猿沢の池 此上に有芝原は積木(まづく)の薪(たきぎ)能(のう)する
所也 中金堂 東金堂 西金堂 南円堂 北円堂 八角の堂也
大仏を入て立給ふ 白鳳年に八宗の一寺 小宮寺 講堂 北の方より
見えし 百巨(く)計あり 一乗院 大乗院を始として
其一乗院子院弐百 大乗院子院百余 附(て)
院家十人計 乗院は妻(さい)帯(たい) 短刀(たんたう)とされ 凡
其身具足ちれち 社領二万又千石余 二千又
寺領 前 菅原(じやう)磬(けい)は 南円堂の前 小 正法院より

有り 西向(めんかう)不空羂索(けんさく)の像 別 演(ひん)石(せき)は 西金堂より
もち掃の四は二柄 人此にあり 伝
寺所のつとりさらさるの 正法院ら 伝授
此今を翁家(まうさう)共替られ 凡此ちに在る八
宗大より 其八宗八宿碩師 帝 和暦二年
の建也 是後小松院御宇 永六年 又是 [illegible]
其建立 天宿様元年にて 凡二百九十一年也 いま
まし八余様 此よ [illegible] 観(きん)猿(てん)沢の信(こう)仰(しん)集会る

奈良の京は東西七条の数なりとぞ云　但一
条より九条まで其坊ち此内に八条に櫛の歯の如し
是より皆行の着きてつゞめり　南の角まで櫛
とすれハ折らし　東北ハ町ともみなも南　其
まし　是より北ハ此世とて人を備ふなり
南と北の大人を敬すれ深のさてし
元興寺　奥坊ちの角より寺の名ハ秘蔵して
小宮二つ大宮の境の　存り

率川　是は奈良の小さき溝川なり　奈良の里
川と云　大和名寄考子継の名所也内　大宮の東に
小流れの名所の人まで立とひ　率川の社
三座三枝の祭とて　毎年の恒例なり　横萩と云
所横萩右大臣　豊成の館し　右大臣の姫　中将姫の誕生
の地也　中将姫とて勅号の名　続りし　父白毫寺也
奈良野　廣し　林多く　南分し　八条の一也
野鳥の境　奈良ハ行客の道路　京と云ふ所也

雪消(ゆきげ)の沢　葛の葉原と云所へ入
細たる道
羽白大明神　猿沢の池より東の方行道より羽白山
此社藤原忠平卿勧請也　社より東の方にあり　則
東明神と云　此神社藤原忠通の方に[illegible]社
飯豊山　百丈石　宥神　[illegible]
羽白山　三笠山とも云　[illegible]日羽白山
八幡の宮を三笠山とも云　羽白山の下に[illegible]

山ところ山と云　むかし安倍仲麿の三笠乃
山にかゝりし月の色をうつしたるもの三笠山と云
所なるべし　羽白山の池をあれ　羽白山とも云八
幡宮に[illegible]文字[illegible]
水屋(みつや)　[illegible]東福寺　羽白山の社より[illegible]
若宮八幡　羽白の社より小高き山の下に東方の
此境内に[illegible]の湯あり　故に東方の八
幡と称す　いつの頃より鎮座せしと

云々年造営ありて甚美麗なり
手向山　是又の佳地也俗に八幡山と云東大寺
のぬさもとりあへずとよみし八幡なり
若草山　是東にありて東大寺の
またく三山の中を通る又つらつら尾山とも云
此山の峰りくとをるかしろき佳地にて
て佳景也
三月堂　つらとも山の麓にあり東大寺の内也

二月堂　三月堂の北なる京にあり石階を
上りゆくかけ作りの堂也実忠和尚創立と毎年
二月朔日より二七日法を修せらる故に二月堂と云
又東大寺の内也腹納の嶽所につれて
佳景なり
東大寺　八宗兼学総本山三論華厳とふかし
聖武帝神亀五年創立東大寺の金堂は九間
なる大仏殿の高さ文丈見えて大かたや文殿

文徳帝斉衡二年五月廿三日大仏の頭自お
ちて地に落つ此よし文徳実録にのせたりその後
貞観治承四年の冬重衡焼て大仏の首お
削落後白河院建久の比頼朝此後俊乗坊重源
上人に仰て勅命にて不動堂の職に補せら
れ再興此世に永禄十年十月又松永弾正より
乱に堂は焼失する事を聞も大仏の首焼落つ
ことなき是を繕ひつぐ此大仏の首かつて事凡三一

成也今は堂もなく大仏のみ野中に坐せり予
惟みるに大仏は釈迦也盧舎那仏と云ふ毘盧舎
那は大日如来也舎那仏とは大仏とつくる也
続野談載に舎那仏の像を高さ五丈三尺八寸
面の長さ一丈六尺眉長三尺九寸耳長八尺
七寸耳の長さ八尺五寸肩のまわり長二丈
八尺九寸掌の長五尺六寸銅大網七十三万
九千五百六十二斤白鑞一万二千六百十八斤錬

金一万四百三十六両ならしハ寸面寸余の
大仏よ大ふ許あいむこさし云大仏の鉢也さき
不よ大なる鐘あり 鋳物師載子回高さ一丈
三尺六寸 上の径九尺八寸一分 厚さ八寸 熟銅五
万二千六百八十斤 白鑞二千三百斤と見ゆ と
ありしとてよ響きをよふよしよしきし
よ後那坊の本像と聖しらき法円あり
の時代わさく杖木履あり東大寺よ大門あり

是の校倉有り 宝蔵ハ正倉院よ 蘭奢や
待并与是奇楠香の極品也 紅沈香ハ黄熟香
といふ 聖武帝天平勝宝年中よ今よ三尺
五十余年ちう 天下とも名剣あり 一尺と二寸
八分に切て献じ 又大織冠重四分貫五百五十文
蘭奢待より青し 是亦香木也 何も
勅封也 聖武帝孝謙の御宸筆 極く山城の
花火郎 山の麓也 東大寺の北の方向の荒ぬ

どてあり是を飛火野と云名所也
郡山 奈良より一里半 宇城より一里半南
の方に城下町あり つゝゐ(?)あし 簀原
より先まで八波多よりつゝきて流に作(?)
八幡 郡山の南にて大宮の西にあり金剛山あると
石上(?)より境也し 世に云此山の半腹にあり又
一石(?)の段(?)の八幡より松尾寺よりあり
松尾寺 今(?)人親王の建立なり此所ある

又信貴山 つゞき也
小泉 郡山より一里あまり西の町也 片桐氏の館あり
富雄川 小泉の東をながれて 斑鳩の里の東
を流るゝ川なり 今ハとみ川と云 昔ハ小川也
法隆寺 聖徳太子の建立なり 大和の名所あり
斑鳩の里 今ハ神屋と云 法隆寺の東又立所(?)に
あり 厩戸皇子の跡(?)つくしる
三井の法輪寺 聖徳太子の建立なり 五重の塔

三重ハ崩て二重ぞ残れり
法隆寺 小泉より一里郡山より二里北西ハ廐
聖徳太子創立し給ふ七堂伽藍也南に向へり
東の堂ハ薬師也又東の堂の西にあるを西の堂
師也東より見えて三施院も一也と云僧坊凡六
十區あり法相宗也八宗兼学の寺なり右の方に
東院北西の長堂ハ結夜の講經を講する所
堂也ちれ門より南へ出れハ町あり並松と云

宿屋多し立田の方へ通るかいたうあり
龍田 町なく町中北の方に龍田大明神の社あり
新宮と云もあり河内の國府にゆく道あり
法隆寺の前の並松の町より此町にまて家所のさ
此町に西家を作る工人多し龍田の町といふ若
屋より新宮あり西にある町ハ家より東の
町ハ正保の比立初めし也社の前に茶屋へ
り屋あり

竜田川　竜田の町を西へ出れバ川あり是竜田川
なり川也 橋あり 此川より平群谷と云 此あたり
の峰ともいふより出る河也 此河を渡りて竜田の
本宮へ一里

佐貴田井庄門　竜田町と立野の間平群谷と云
所より三十三町ほど一町ほどに石表也
左ハ立田越の山也 是より此所ハ毘沙門也
開基ハ聖徳太子也 堂ハ半町ほど所にあり

よむかへり給ふ十坊ありし跡あり山林ありて跡を
そこより松永弾正が城あり又松永か居城の跡
あり也けれ共いまに残れり本丸と云 是より一里
より大和河内の国中を見下して好景なり

立野　竜田町より半道ばかり西にある町
也 町中に竜田大明神社あり本宮と云 花の
西にある名所也 歌ハ此處道風の手跡也と云
なりの歌あり 此社竜田大明神の本社也

神南山（かみなみやま） 龍田の町と西にあり川より此山ありしこ
下の村名を神南（じんなん）と云
三室（みむろ）の岸（きし） 神南は此山の側なる岸なり一説の
立田の西に山の麓なる所あり是を三室の
岸と云 何や山あれはなるべし所にいふ岸
なる所に古今よまれて河合せしもの也を下に
紅葉川とて小溝なる里あり是を龍田河と
云事やらし也 龍田河と云ふ流に何ら此

竹長乃紀に云 立田の川とうとうて神南山
此手と三室の岸は其所にて竹長也此手に
よりたるゆゑんなり是又三室の岸神南山
の側にある紅葉をのせし物語に龍田にもとら
と八塩（やしほ）楓樹（かえでのき）よりしたる紅葉といつの
なるべし立田とよめぬ古今和歌集にてとかぞ
此みちと事寄し方八尺と何ら此今は龍田
山より神南山立田川の西にありて楓（かへで）の木

もみぢの名所にて楓二三株あるのみ也
立田川の上に平群谷あり此谷のおくに八
楓樹ともいふ八坂といふ立野より當麻に
坂より又龍田へ降りて新宮これより南へ
行ときハ又龍田河あり是龍田町の
西の方にて河是下流より西より東へ
流れ来て大和河に入なり
神南 神南の森ハ河の龍田河是南乃

岸の傍に河れ里なりこゝを神南と名
つけし事ハ立田明神の南なる河の流るゝ所なりし
此里を申南此方に行けハ大和河のさ船こゝに
それより此所ハ流まて渡る此河ハ長谷より南
大和は國中の諸流皆是に流るゝ此川龍田
山の谷々を通りて河内の國府に出て石
河川と一に成て大坂の京橋にかゝる 細流
川と此河へ入也

竹内山 麓に竹内と云里あり此道の
京よりくだりたる方に逢坂有り此所
此坂に厩戸皇子此峠にて逢坂に逢
給ひしと也其より穴虫より是を一里許
ひがし 此所にありそれより河内の國府へ越る
そこひがし越と云
当麻 穴虫より四里半是より七里半竹内
竹内よりうちは八尾山の方へ細道を通る

当麻へ入らんとする所に寺あり [illegible]
堂ありそれより深夜の井あり中将姫の
其此糸を染し水なりと云又[illegible]を
桜の木を以て其の糸をかけて干されし
桜なりと云桜あれば之をかへしもあり当麻
寺は又孫枝ありと云用明天皇第三の皇子
麻呂子親王の建立なり二上山の下
よりうちは麓の当麻寺の内へ入る也

堂八間あり也本堂に勅筆の額あり曼陀
羅堂とも云中将姫乃蓮の糸にて織たまふの
御しゆの曼陀羅と云は此堂に中将姫
の像あり三十九歳の像と云此所八葉の浄土
あらはの僧居住の僧ちらしあり本堂の後に又
寂照あり右の曼陀羅を写して又ありし中将姫
の真の曼陀羅も是に納あり堂中に八角
堂あり[illegible]此小ちに中将姫のひたうあり勅

くらだ本院と尼寺あり本?りと
て庵室あり本像ある十七歳の時の姿也
云東の方に尼寺あり此に紫雲庵といふ
小堂ありこれも中将姫死去の所也本像は勝観
の時の涙ありと云西方二丁より嶽の麓に
蛇樹木して膝ろざてりあ本堂の下に大なる
古松あり根南北に長くして東よりすぐ懐松
ありいふに塚二あり奥の院あり凡四ちは

石寂そ殊勝なる所有り山ちの南に有り
所ハ東門ハ大和也 西堂勅漱へむかふ也
也より吉野へ八里余 小門ハ穴虫へ出る也
二上ヶ嶽 丸子山の上にあり二上山と云 此
也なり葛城山につゞきたり みね二ツ有りふたごと雄嶽
云南東を雌嶽と云ひがし 西山ある
り 故に二上ヶ嶽と云 二上ヶ嶽の南に三
て河内山田へ行ところをいはや越と云

柿本村 柿本の人丸の墓あり
篠峯 二上ヶ嶽の南にある山なり 俗に八大山
ともいふと云 誤也 篠峯を岩橋と云ある
河内より大和へ越る道を竹内たうげと云
葛城山 篠峯の南に有り 篠峯より程高
き大山也 是金剛山也 山上に葛城の神社
ある山より一町西の方に金剛山の寺あり
転法輪寺と云 山上に六坊あり 山上八大和あり 南八

河内に属す婦人ハ此山に上る事を忌む
され大和の方ハすこしあり一里ほど河内境の
のかりし水分社あり六十六所にあり或説に
日本宝殿の高山なりと云此山に坐す大和
河内摂津和泉國眼下に見ゆる
高間山 すこしに高ありこの山の後に続く高き
八木 町あり郡山よりもぐさに所に通る中
ためあり里数五余に田原本と云町

あり郡山より田原本へ三里田原本より八木へ
一里八木ハ高市郡也是より今井へ八町あり
八木の町中より大坂へ行道を八木より高田
一里高田より当麻へ行也又八木より長谷へ
出ハ吉野への大道也
今井 広き町也富人多し大和の國中にて
富饒なる所や道の西へ町にありくわしく
云是より大坂へ行道あり

畝傍山（うねびやま） 今井八木の東南の間大町西にあり里人ハ御ほと山と云山の麓にうねひ村橿原村あり神武帝の橿原の都此ほとりなり一説山の東大久保と云所橿原の都のあとなりといふ日本紀に神武天皇長髄彦をうち天下を定め給ひ畝傍山の東南橿原の地國のまゝなる都を作り給ふとあれゆへ神武の陵（みさゝぎ）ハうねひ山の艮（うしとら）に在今ハ

まつりに　　田の中にあり里人ハ神武田（じんむでん）と云大久保村四條村のあたりなりうねひ山の西北麓に神武天皇の社あり又安寧（あんねい）天皇の陵ハうねひ山の南にあり日本紀に年を編年に八片塩（しほ）の浮孔（あな）の宮畝傍山の南にあり又四條村の北宮居此所也安寧（あんねい）天皇の陵ハ乾（いぬゐ）の方にある田の陵をいふ綏靖（すいぜい）天皇の御陵也

坤の方にハ孫の陵にこそ安寧の山陵也
艮の方に小谷の陵ハ是懿徳帝の
陵也凡畝火山より此辺大和の国中也平京
の地まで碁盤の表なるべし

久米寺　久米の仙人建立なる薬師也
来目の邑とも云ひ山の西の川辺にあり
也日本紀に見へたり此辺に於て衣洗の所と
云々久米仙人の見し女の物洗ひし所と

佐抜よりは見へたり久米ちの道花山と云
樹の子益田の池の跡ハ平らに称れ蓮華寺に
宗満のかたる碑あり是を得しハ分也又
越ひ引寄皇君の陵も益田の池の西よも益
の池名所なり嵯峨帝の山附かなせら称久米の
龍子よこがうとこ云所町なり

龍る　久米村の民家にあり名所なり

耳成山　名所也俗にハ天神山と云八木の町よ

八木町より東へ一里 香山の北也 此道より鷹
田の池より方へ十六丁より東へ八木より
ひ山久米の方にゆく 又此所より安倍飛鳥
の寺をも通りて 吉野の方へ行ハまはり道なれ共
名所古跡を多く見んためなり 此所より八年
生山此南より東は八木より橘寺へゆき岡
寺も飛鳥也 横大路とも云 安倍の花も耳なし
山のかたちをよく見て云

吉備村 此の南より吉備云 此村を通ひて是を
云 石塚より吉備公の墓とも云 此所に大仏 備村
という邑也 拝す小墾田の宮の跡 小墾田の
也 吉備村より東へ行事 宮所 此所戒重と
云所より此所八釣也 弟比皇居 磐余池
田の辺也地也
天の香山 ひとつ山也 膳夫の村と膳夫村と云
吉備村より南より東ハ香山の東をいふ也

天香風土記によるに畝火山耳成山香山を大和
此三山と云國中にハ此三山の外に山なし是
の事なり其れハ藤原ふもとより見渡すに三山一
目に見ゆる也

安倍　文殊ハ崇峻天皇の御宇に安倍の仲
丸此所にて生れ此里の人と云　仲丸の墓とて田の中に
在　但し此人ハ唐にて死せり其の墓あるまじくハ
なれバここに雷丘墓下にも在るよし

桜井ハ前に詳也
飛鳥の里　飛鳥井ハ町の中にあり東に飛鳥川
流る一説に飛鳥の御堂のあたりに飛鳥社ありと
あり　飛鳥川ハ河内にありと此川又淵瀬の
定めなき川也此川ハ淵瀬さだめなしと云
ならず先帝の皇の都の地也難波の都にて
云下ハ此地に在今ハ地也豊浦村の内にあり
豊浦寺の東飛鳥川の西難波堀江や見

安座大佛佛像をすゑて安置し奉
なり今ハ其のころと云伝ふもみえず
豊浦町あり此里ハ舒明天皇のみやこなり此
天の宮也又斉明帝天武帝も居給
此ところよ往給ふ東此寺のゑるさ所よ都ある
寺あり此れの孔川東や豊浦とこそ云又
智了皇建立し給ふと云此寺は推古の宮
と云飛鳥川よちかし藻垣草よ年寄り

橘寺　長尾町より又町より行て左に
飛鳥川行ヶ所ら聖徳太子勝鬘経を講せられ
し所也此あたり天宗で皇居にかぶ穴の所也と云
土佐町　高取山の西也ふもとかり高取山町也
高取山　土佐町より東也此山とよ城ある也さり
吉野をもらへて往来する也ゆるり山乃
とよ城ある也重世概あり山の中よ檜隈村
宣化天皇の都なれ跡也檜隈川と見たり

壺坂　土佐の町を出て吉野の方へ数町ゆけば八
清水谷と云町あるをすぎて東にそれて南
ちかうゆけば山の上に壺坂の観音寺と云
の札所也　高く見ゆる高取山下より比蘇寺と
云て吉野へこゆる坂にはとうげの坂あり
比蘇寺　聖徳太子の建立の寺也元亨釈
書にみえたり
芦原峠　大和の中なり八木より吉野へ

越るにかかる坂也ひさし坂を南の方へ下りて
村あり芦原村と云凡大和北国中より吉野
へ越に写の坂あり高取の峠より越を細峠
と云るをけりて竜門峠より吉野山へ出る是東
より宇陀に至る里の町よりうるしの東
を廻りて越を芋ヶ峠と云吉野山へゆる
ゆる是余る嶮なりと南へむかふ次に芦原
峠也吉野山へゆく次に車坂是芦原峠

の西よりある道もひがし道ハ當麻のたへり
越坂や左の方より又紀州より越とぞ名付ける
と云又五條より一里ばかり伊勢ちの越とぞ云
へん哉とか云へ高取山也そうらん岳よ吉野より壬生
當麻町まで土佐より二里まで伊勢より紀州へ
通る名也高野の吉野の藤代より十町
そのうち下より江のつよつまや土田より十町
かりよゆるもとよりてゆむとひよこせバ六田也

又土田よりすぐにひがしハ飛鳥と云町ゆりよ谷也
と云そのちの二三町下よ下渕と云町ある也當麻
の方より下市へ行也吉野より下渕へ十町也又
下渕より紀州へゆく又下渕の川むかひの八町下市
也様まてよる下市ハ家人多く民家も繁昌也
と云道ハ紀州へもゆるよハあるく天の川十津川
へゆける又東者吉野郡也天の川へ七里
ある下市より毎月六度市立也吉野中の商人

行ハ下市より吉野へ二里行ハ川を渡られ
しそ六田を渡りて行ハ六田より吉野へ一里
半六田より紀州へゆくに大淀へ三里行ハ六田よ
り吉野へハ下市よりまはりて又六田へ
かゝり

六田(むだ)　名所なり吉野川を渡る所也むつだ
たゝむつだとも云又柳の渡と云吉野川の南
ニあり此川むかひなり川上ニ六田の淀とて名所

所あり吉野川源ハ大台(おほだい)ケ原より出て
常より八里上るなり大台(おほだい)ケ原とも云或ハ大
臺が原ニ巴が淵(ともゑがふち)とてふかき所あり吉野川
熊野川伊勢の宮川此三大河の水上と云
但巴ハ瀧鏡なりとの名あり但熊野の宮ハ八巴(やつどもゑ)
みちとて水の出る所と云吉野川の名
ところもひぐらしの三河ぐ萩代下流さ
あるかれあとく源ハ一所より八方へのかれ

さて思ふ但西風にハ東へ吹く多く流(ながれ)て
吉川の水もさまさる東風ふけバ吉野川の水
まさる西風にも亦進吉野川にも吹(ふき)まどり
やがて東風烈(はげ)しくこれハあふらんしてを
吉野川の水ともなると云上市より河上ハ
夜其(そ)大和國栖(くにす)西河(おほかう)也上市より下ハ河北
まで廣し上市より上ハあやしの宮を流
れて河のまどりせばしあやかくの育甚

高し山高く嶮しく此河の末(すゑ)ハ紀の川也
紀州和哥の浦へ出る紀伊の湊(みなと)と云六田辺
ゐてやがて吉野山の坂にのぼるを一の坂と云
一の坂をのぼりゆけハ山口に蓼(たで)樹の明神在
丸宮の町に水分ハ山上二の坂より吉野の町
まで五十町の間左右ハ谷並(なみ)木の桜也又
安禅寺の山にも谷にも桜多し坂口より奥
の院まで百町あまり二子守(こもり)明神の奥の院の下

まで八町あるかたはら大きなる山の尾ありて其
背を通る六田へは尾崎あり故に其山を
よこぎるは六田より入り本道なり吉野へ行人は
必ずしも山道より入るべし飯貝(いがひ)の方よりも吉
野町へよるそれはこさ道あり本道よりもちか
き所也昔大楊の木高さ二丈ばかりなる
を前にもちて庵澤(なぐは)とよびてうゆる法樂(ほうらく)の
人是を見ひらくべきにて通る

吉野町 町の入口より子守明神坂の下まで
其民家つゞきて千余軒あり町は入口のかたに
たれ山の続きに桜を日本一の花と云此木桜
むかし日本一の花の第一より洞の前まで
を関屋(せきや)と云関屋の桜と云三所より東に清紅山坂の
善也高さ二丈ばかり桜のめぐり一丈一
尺と云高さより少なく坂の上に義経(よしつね)
の旗鞍を吉野法師にいけどりに捕へし所也と云

凡此地ハ金山寺山の尾先にあたる高き地にて
背屋のように民家を並べ建てたる故作りよ
て三階の屋や但上の方三級の客家ハ大概な
みな常の平屋のごとし二階の階ハ大く
ほとんど次の方二級ハ空き居室や物置なり
上の座敷より其の居る所に下るにハ
椽に入るごとく階より下る処ハ二階より
これらみな文階よりあれハ土座の座敷を見ハ

雑物薪木と様々置所や浴所廁もここかしこ
客人ハ在所ごとに好所ありて其処の宿
宿の家に泊りて各好み所を定めて一町ほどある土産をうし
葛 籠 烟草 紙 くだものなども売るあり
茶 塗物 挽物曲物 又楊枝なども売るあり 漆
椀 山折敷 挽物 松茸 鰹節 瓶 節
多くの名物ありといへども 香茸 蕎麦 道記
の戯の品物あり 頭巾 法螺の貝
荒野ハ高き所に在る後の三門外に向ひ堂

八角にむくり大屋也おもに四本柱あり此堂ハ八
町のまへりおもにあり
寶塔(ほうたふ)ふるし 荒王堂は航の島の所なりと云石屋
三百余つけり里民ハ四屋義と云経砌(たたこ)坊経村上
二帝八十六年に行幸ありし皇居の跡也と云此時の
皇居の屋をさりまし撲(ぼく)して取り残りし家
と云家作り甚だ古風也華飾(りざん)なし其子(すゑ)皇
居とて云つたへし当寺の御在所を出入して京

よし歌よみしかるしるもしられぬ吉野のお
くれ兵庫是ハ古へよく経砌(たたこ)坊寺の跡(あと)しなひし
をは此所にてなをし故(あらた)め帝御移住時の大鼓(こ)堂
とよばるにあり
吉(よ)水院 荒王堂のおもての町より左に二町
ばかり下る所なり古き也又治承の頃源の義
経大物(だいもつ)の浦より風波の難をのがれ此山によりて
夜に入ひそかに此所に入る吉野の法師に義経

をうんと定し取ちをおか中院谷に隠し、た
傍院跡を求め来りそれハ作為なんどとおし
て旋矢を射させ義経を捨まで多武の峯を
経て角院の内裏室ニ十字坊へ入られしとぞ
又義経硯筆ハ其節を逃させぬひしるよ
潜幸ありし時先帝へ切来りて行幸し
しなバ実城なるに移りたまふ此院の床を御
枕として御殿をし給ふに花に経しや

吉野のすみの此院の下より見えし御堂
を世尊寺と云、是此院ハ天の時に山の安
り給ふ所にて後此寺ハ義経のさゝめり
居らせしも此硯筆て皇の志ゞし宝居
ぞしかしも所今の家まてしかもかり
るにとて其ふるき家まて今をひさし
稿荷の神
の原　東子生　花主書まり　町
寺子よりる大岸
是の名此原道

燈籠の辻
樫本　高取山の山伝ひに大峯道にあり　のこる也
勝手明神　左にあり　右の方に立る宮二社也　小
向也　此明神において　静御前舞を舞し　於此
其昔義経の従者静を人にあつけしり所々の
往大男にしけ失ぬ
袖振山　勝手の左にあり
袖振山　在明神勝手明神の後也　此上に

の側に在　昔天武天皇此所にて琴を弾し
給ふ時天女下りて羽衣の袖をひるがへし
舞ひし故袖振山と云　此云伝へより人丸
の歌　宮城にかよふ袖振山の舞を又
大伴王遊びに吉野宮に侍る
夢違観音　獏は観音とも云　是は太子の
此さくの谷に滝桜　雲井桜などと云　并桜ハ
さくらにつゝみ滝桜ハ昔ありて今はつゝみにつゝみ

の社は下の宮なり
禅定寺 禅宗にて今黄檗派の寺なり
大将軍社 なにたる筋やそこゝに辻堂あるぞ
西を中院宮と云
荒矢倉 辻土居かこひなり 太秦に隣る矢村なる
昔や横川の禅師荒庵のうつされし所は此
大の宮なり
辰巳尾 荒矢倉のことなり 民家あり其の

右大臣引の桜と云
世尊寺 此所に大なる樟あり元亨 嶽云に向
なし本像のうつし見ゆるよし云ふ
子有の神 西向に立てり 社殿は甚ひさし大廉也
ほとりに古き神と古木のよふにしハさし神なるへし
秀の寺より建興せり小堂のやうにあり其より
よふに八町西なし平地をゆく也此社せかる也
ゆきて牛尾てこの叢祠あり西の方に大

牧岳とて大なる牧あり魔(ま)一郎と云此谷と
桜谷と云大峯行り
高塔(たつとよ)山 若菜原より絵尾僧に塔山と云
此道てしの是をえ太平記にりさし大塔の
宮此こもり給ふ城あとも或曰大塔の宮此城
八ちく宮の嶽(だけ)なり敵(てき)八よの宮御そ谷より
寄たりと云り宮御八此山下まて来て来八郎
義(よしてる)光也村上義光の子信ての僞て自(みつ)殺(ころ)しなりまけり

高取も此地なり
えらみ谷 つしり是より下るえ々えの
谷也廿ほど梅吉の谷とハ山の尾てと備(そなへ)て
て重き生茂くえゆる谷なり余子なり
つけえらみ桜多し
岩(いは)倉(くら)谷 えらみえ谷の西之えらみえ谷
と左右に対せりえらみえ谷八左右にあり
此谷ハ路より左右にあり桜多し

金精大明神　是吉野山の鎮守也此所より

十丁奥の院まて下寺なり

蹴抜の塔　金精大明神の左の奥の坂

と上りて行ば此あたりを隠れ家といふ此塔ハ

弥陀の宅と云しといふ古塔也義経此塔

の内に隠れ居給ひて逃のびし下の谷へ入給ふ上

此天井をけぬきて落行給ふと云伝

に義経のけぬきし塔と云

吉峯　けぬきの塔よりも上なる高山なり

名所なり古戦場多し此下に義経の谷とて古

義経弓を捨られし所と云此所の谷に

義経の落行し時弓をたゞ捨て向へ

とられし也よし

奥院の茶屋　坂をのぼりて右に

安禅寺　御嶽山といふ伽藍なり右に多宝の

塔あり本堂ハ蔵王也役の行者自作といふ

傍らに又宝塔院といふ
四方正面堂 おくの院也安禅寺より前に
ありおくに本地仏の堂あり 釈迦弥勒堂
深仙にも堂あり 是より奥の院迄ハ
なほ一里あまり 吉野山の絶頂にハあらねど
絶頂ハ山上とて始むるあり
西行の庵室 四方正面堂より西の方に
西行の後より跡あり山の奥に二所程り

てくだる所に小川あり 小流あり 苔の清水
とぞ 庵室に西行の像あり 西行此所にて
の詠歌多し 此所に三年住けると云人迄
かく閑寂なる所也
青根が嶽 安禅寺の前の茶屋より東にゆけ
ハ大峯へ入納めにこゝを先に青根が岳といひ此
所より左へ二丁ほどよる左て西河へ入り大ハ
大峯へ入る道より山上とて又道修行よ

了一里余の窟際(とざく)にて山伏護摩(ごま)を修する事毎
六月朔日より晦日まで行人潔斎(けっさい)してこもる
毎年七八月に此山当山の岩洞は先達入峯す
岩穴の所より三百八十餘のいかやうと云蟷螂(とうらう)が
窟(いはや)有ここに此窟菊の窟蝙蝠(かうもり)は窟中の窟
名とむ大きなる蟷螂の窟ふのとこの二所修行
は廣さ一丈人大ほりなる三つ所ほどありて高さ下にも
物くし池の菊は窟八其岩ととく(とくく)菊花の紋と

なすりとてかの山伏の秘事なれどもつたへすまする
し凡吉野山を金峯(ぶ)山とし金の御嶽(おたけ)とも
國軸山ともいふ清めの納にも枕の事子には
とす 云ふ山奥の院よりあの行へ入ると云
清浄の行 まづ此の掌より一つに山は此の
行 是大峯(おほみね)の修行也十二の行もわるの奉つ
あるは行や行の三宝のうち閉ぢる也下の
名と蛙(みげうな)蛤は水を取て谷高なり八蜻(せい)も

早稲田大学図書

頴の瀧なるへきをあやまりて清明の瀧と書
なるへし此の上なる山を琵琶山と云此瀧の東
を音無河と云此所のかたはら川上ハあらん
西河の瀧 是吉野川の上也大瀧とも云村の名
なり大瀧と云清明の瀧より五町ほとり此
瀧ハ只急流にて大なる岩を流落るなり
林の瀧 此ちかく高き所より流落るにハあらん
岩のあはひの流より沸事甚見事也よく〳〵きて

見る人ハ驚く見てハ不堪 是より山を越
て少行ハ又村の名又西河と云此河を
音無河と云清明の瀧の流なり此河ハ吉野
川へ下流になるなり下市町ハ上流になかし
是音羽の名也訛言にてかくと西河北かくよ
所々村里あり義淨西河へ落りしはし宿
此辺に泊し大分今井國次二尺六寸を
國栖 大瀧より一里此里ハ宮瀧と西河との間

に有りし村といふ處應神帝十九年吉野
の宮に幸し給ひし時國栖人來りて醴酒(ひとよざけ)を獻
し奉りしといふ事日本紀に見えたり今の世
根源(こんげん)に曰國栖の奏とて今とても經を讀奉る
是ハ吉野より到りて紙を奉りしといふ事や又
清人原て是は山本に入せ給ふて宮の御前
あれは里に人あまた紙を漉く漉(すき)の所
や國栖紙といふ厚き紙あり此下に櫻花

尾樋(ひ)といふ所あり
鬘(かづら)箕とて竹にて作る村の方より度箕へ
出るに徒かに峠ありて一里の路ありて其下は
谷峯の水に乗うて度に蝶が瀬とて流くに落
流落るる又の瀬蝶の形に似たりか下に櫻尾
の谷底あるを越えり三町ほどり行きては度を
先の度を川ハ花あり之吉野河に通ふ筏を
下す下りに度そのあたり附近を下らしむなり

此村の前にも舟岡山とてあり此
さハ宮滝の北の山を舟岡山と云なるべし
宮滝 村ハ川にむかひて宮滝より三町程
リゲバ宮滝の西河より此所まで一里余あり
山谷めぐりて宮滝ハ滝にはあらず両岸より大
岩さしいでたるを吉野河流るゝ也 両岸ハ大
なる岩なり 岩の高さ五丈許 屏風を立
たるがごとし 両岸の間川の広さ三丈許

せばき所に橋あり 大河もこゝにいたりてせばき
故にふかしとぞ 景甚妙なるにや
宮滝ハ後撰集 古今集 新撰 六帖にも
出たる名所也 紀の男 舎人の翁の吉野の詩
所の里人 岩飛とて岸の上より水底へ飛
入て川下におよぎ出て人に見せ銭を乞
飛時ハ両手を身にそへ 両足をあはせて飛
入 水中に一丈許入て 両手をひろげて浮む

紀と云又是より東に流るゝ河を又白くもせぎと云名
所なり又大河の邊の舫の小船をまもれる名所あり是
又もこゝに菜摘の里あり是ハ吉野の下流に
樋の口あり是ハ吉野のせ山に移し其下ハ上市
なり故に此地をさくらの飛つの条とも云て出る
桜木宮　吉野より又所なり昔芳野の御座所く
左の方に橋をこえてけれバ小山の林ありて内
に小社あり是桜木の宮なりと云かに流るゝ水を

象の小川と云名所也吉野の名所也　橋を都　象橋
と云又それより又象谷と云村あり桜木の宮より
十町斗也此ハ坂なく高殿をて此あたりその山を
象山と云名所也哥などにも多く象の中山
とよみけり此処と云所なくそこえて山
をこえれバ桜多し是より鳴滝あり又
如意輪寺　喜佐谷の社より八町程をこえ谷の
むかひなり今ハ浄土宗なり山寺なり

帝を葬まつりし也 陵ハ後の山に在るより
御しるしの陵あり 寺には後醍醐帝の御自らきざみ
給ふ御自身の木像あり 衣冠し玉へる御厨子
のとびらの内に吉野より熊野までの画図を
巨勢の金岡の筆しといふ これには後醍醐帝の
宸翰にて此楼の絵に賛あり 何も七言一句也
平仄律にかなひ 韻をもあそばしたる也 又此寺に
楠か硯あり

吉野町より西河大瀧搦手なく極て嶮しくし
往来なきにあらねど路嶮なる所多く殊に熊て中の
時向るは大きの宗仙山にまぎれて見えず其上
流を絶に山高く岩そびえて川流はさらになく
林木うるはしく枝山ことごとく見事なる景なり
山中谷底に樅の木多きこと幾千万株と云
事しるされ
凡此山ハ吉野の方の林叢より奥の院まで百餘町

のつる民家なき所ハ左右皆並木の桜や又九
十九谷も下の谷を左右のかける所くの谷く
に至迄皆桜多し去れは桜の二三月ハ花の世
界とぞ行無し梢ハ谷底に多くして山上ハ
なし表ハ梢葉より先花咲初てやう〳〵山に
咲のぼりて奥の院まておゐる梢葉の花盛りて
中にも花盛りなる中の花盛りてしかれとも盛
に咲くそうる大やう三千日徐るゝ又咲は桜ハ梢葉

にとはなくに至りて表此辺子奥の院此花盛の
比盛りに開くをも初桜ハ高き所もあくもつとも多く
咲也凡此山の桜ハ皆吉野ハ八重桜ハ山中及
民家桜坊にも一株もなしと風をつけしき年
或風雨久しく続く時ハ花の吉野ハしく花にまた
にあらて好吉野の向ひ此四季年中の花今
よりも此山に桜多ししこハ吉野より外かげ山侍
又日凡此山の花と中下一時に不咲とぞいふとも

ゑりさまり六十余日に南北路を過の
最中にハ又里人数人に暇をこひ昔めでし所
然ものの詩歌に名のこして今昔ありし所
あれ桜多き所のさかりにある吉野の所
ともおほあき合に出のさかしきにある花をと桜
はさかりあかりとてたれ花の内に入ばかりむかひ
たり花なる一千町ばかりして見るに見え
えて皆桜の林なりおりしるき事なれども

いかんてもいまりそれあけぼののそらひとえだのころそし
まだあさとこれ雲ゐむのところにさまざまにてらし
ころまそれひとさ世の外れ梅に見とあやし
咲る所とそ桜を雪とまよふことありぬるハあや
なし山れりく花とり又答ぞとにありてむかひ
よきところぞに所にある旅人とうるぐさそゆ
此所のもハ宇多帝の山のさくら花のさこの上ある
とよさ所ありれそとつくそとこへハ大和名所図

すゑの内をえらびやうやうあつめてた
ねらんの八やまとの八ぐ(?)にてちれぬかそらくハ
えぬ(?)ものにして手をあらしきそ四五百かの(?)所
多し國ハさくらも花(?)ありてものむすあかそらし山
山のそて桜を切ことを堅く禁ぜられ桜を植ることを好み
世の人ことに桜を植へてたてまつる事にて内々の桜
何れハ里人ことをそへびさへ里人の偏に桜
をあいする事もあられ蔵王権現の神木に
て伐ものといひつたへて神の祟と畏る
ゆへなり
蔵王権現に御朱印五百石寄附ありて又三百石
子守勝手の社に各三百石又傍(?)あるう
寺院多く凡此山の内ハ東西(?)六町(?)あり
中にも七十坊ありて今三千坊凡百坊ありて云六
ち(?)仏多しといへども中比乱世に兵火に焼失せる
を豊臣太閤秀吉公の御こころざしにて再興ありと云へり

ろく今に伝はるその左にしるされたりとし
○翰林学士楽撰曰吉士の名何れの時初て建ら
れけるといふ事を知らず神武天皇日向の国
より船にて難波につきて河内へ入るとて生駒山
を越給ひしに長髄彦防ぎまゐらせけり八
十梟帥をこえて吉士に入給ひしとぞ鳥信
東に日本紀雄略帝十九年吉士を召して
りさありて武帝も吉士を召させ給ふ

相続て皇八年に吉士を召されしより事成
就といふ事を知られ文武帝も陰岐之文
翰林学士義撰に曰元正天皇養老七年の
月吉士の組に召し給ひし時鎮之朔臣
金村といふ曰神代より吉士の名此何人の
たくしられる人なり月とよめ此に吉士の文神
武こうありしとぞてもつのふし細井武
帝敏達の擅原氏などにおりし河内

取て離宮を搆へて臨幸ありけるとなり
神世ハ神武の御時とぞ申ていへり又聖
武天皇も神亀元年三月吉野に行幸あり
続日本紀にみえたり
○丹生神社ハ勝手明神と役行者の開発
と南の方へゆくをたえと云吉野と云廣橋也
吉野と云所と爰を越る嶽もあり吉野より四里
ばかり也社ハ二十二社の一にして名社なり丹生山

丹生川あり下市の方よりも此川にながれ
出る丹生社まで是より西五里許り
○高棲山子風閣ありとて是よりありて聖宝僧正
のたてられしと云
○吉野の臍此方ハ伊勢也坤ハ大和より紀州に
つゞけり西南山多く重りて其間をまき義
津とてそれより又四五里に十津川とて温泉
の出る里あり吉野より十六里ばかり吉野の東

西南方ハ皆山高くつゞき只北方ハ播州にて
山中に宮里ありて山路浅し深きハ数なき深山
幽谷あれバ人跡絶てあやしき所あれバ其
其の村ハ云ふに及バず近き村の人又ハ奥の
院荒生へと参詣の男女絡繹してたゆる時なく
参宮の事甚多し鎮座も亦多
しかるに宮人も多し宮人の風俗好く屋
形ちを潔し又宮人の今に至迄絶ず漆

器多所あるへし主此塗を絶えちらし然
よし山中なる所に里俗淳朴なりて彼
云ふハ山後の宮を携せる事に落ちて家
此價も大やう不貮なる事数なく名
匿あるへし今家山此事ハ義楚六帖第二
十一書にもみえたるを知れたりといふとも
実しられるかなや

○吉野ちり乙の川へ宮と泥川へ宮と小篠へ七

至大峯へ六里　京へ二十二里　大坂へ十六里　奈良へ十四里　多武峯へ四里　紀州和歌山へ十七里　高野山へ廿四里　伊勢山田へ二十五里　又四里あり

○是より以下　吉野より帰路をしるさん

七曲坂　吉野町余程人家より少し帰りて町中より右の方へ行路は多武峯の方へ行路にて吉野の傍蹊なり　此下の坂を七曲と云　此坂にて村童共多く桜苗をうりて所　原縁と称て

植る也　此苗を桜田と云名所也　下れは左の山此傍の桜を俗に日本の花と云　此所に桜多し　日本の花のむらひに花　葛城山又は金剛山あり　皆見ゆる也　古歌に左に浸上杉として大峯ありそれの見ゆる高山の井は名所に本縁の事あり

丹治　七曲の坂を下りて　右に坂の村なり

飯貝　丹治を出て　吉野川の南岸　半里也

町ゟ芳野葉まて猪飼の山とある所より
はなれ渡りと櫻の渡と云藤原の宮より吉
野河すなるれ那律の橋をはゐての事なる也
上市　吉野河の小岸まて云所也飯貝のひたは
なり船にて渡る上市より吉野の國なれは
ゆるたあつて山谷へ入是ハ葉の嶽よりたけ也
なより八龍門の谷川内に入けれ龍の河をすれある
又そこより河を隔て妹背山とて妹山有飯貝の

方よりあると背山と云是也古来の歌に因る
龍門の方よりあると妹山と云是也是ハ義山
なり妹山背山二てともまこまうれ因しなりな
両山之間をつきて妹山おもひて西山の方を
吉野河流る古今集の哥に流ては妹背乃
山の中に落る吉野の河のよしや世中とよ
みたり妹背山ハ名所なり古今の哥多し大和背
の河を読るに古今に吉野よりある所も紀

伊にもあ家ぶ云ることかりける顕昭の袖中抄
大和国にて妹背山ハ紀川にありといへるた
て吉野川の下にありといふ流れて紀川に
おちいりて流るゝ背山と云妹山と
むかひあへるをいへるハ日本紀孝徳帝
紀にも紀伊兄山とあり是妹背山にハあら
ぬ古人名所の名をその國をとりちがへる事多
ほし吉野の妹背山ハ古今の歌によくよめ

て紀州の山ハ古くの歌にあらず後は
捨て行るの歌によまれてもうらはなるゝ世
を吉野なるいもせの山の中に流るゝ人
是ハ此所に流るゝ妹背山と見へしより
外にハ吉野川の末紀伊の湊までの所に流
るゝ二ヶ所へつゞく山なし妹背山と称しが
たし此ハ紀州の名所て伊勢へも紀州へ
も通ずる大道也行人多し紀州の方にもし

凡二十一村ありと云 此山高くして谷迫れ
り 妹背山より上太瀧へ行ても此所をとをり
龍門の茶屋 所ハ此谷の上に龍門の瀧とて
高山の巓より石二つに見ゆる山なり此山を吉方
より能く見ゆる高山下に龍門の瀧ハ此茶
屋より左の方に行ば瀧あり多武の峯へ一里
程登る左より別れて龍門の岩屋にて候
故ハ行ても多武の峯の方にゆけハ行

に谷あり これを穴笠と名付けり 此里にも大
なる榧の木多し 村民これを子と收め蓄へて
利とす 凡榧の木一株に数斛ある実の有と云
昔此里民これを富とせざるに八榧の本此
数をもつて凡子によつて色他国の富豪乃
金銀を讓与ありしごとく榧の数をもつて
之へ分けと云 此さされ起未とされ成功なれ
此邑の山に小國の杣人集りて材木をとれ

て加茂山又東叡此方へ出れ里余もあるか
とも又は山中より小なる庭木を掘て
緑樹のごとくなるなどを多くのへて持出桜井此
市にあつまりて商ふ

西谷　長太村茶屋あり
細嶽　此茶屋より一里ほど下りて縁
坂を登りて東山の顧を見るに八泉山を
して幾年も茅里ともいふ事を云ふ此山皆なる

し越中大峯釈迦が嶽むかふしを順ハ西
に紙なるて見ゆる世俗に云ふ高山の北東を一名
士二釈迦と云ふ是をもて冨士に比する高山
なるべし此嶽より吾妻山ハ坤の方にて見ゆ也
の附ハ山白く見ゆる山背の町あつまりて見ゆ
越中荒玉立も能く見ゆる細嶽ども少へ下りて八
谷中に入は此所へ民家多し又深山あり
谷なり

多武の峯

談山とも云 吉野より峯つゞき 細川より一里 小よ至 細殿より此へ流るゝ 谷ハ桜井此道へ下る 又万の滝より西より流出る 横滝 又くなる 多武の峯此入口なり 橋ありて是より西へ六町 此寺ハ多武の峯大職冠鎌足公への御廟なる 大の寺此下の坊なる 不よ至 西面也 峯坊ハあり又御廟寺ハ門 庭皆其霊 む甚[illegible]より 社[illegible] 石[illegible]り 廟 [illegible]

多く流る 廟後ハ多武山 向ひ子[illegible] 談山の名なし 御廟の西の方に 其ハ塔ありて 多武の塔也 此下ハ大職冠鎌足公 此處至る とそ 長子定慧和尚 持律国 河内の盛山より 移し遷座せしむる 此事ハ文武帝の御宇 大宝元年 定慧[illegible]ありて[illegible] 塔ハ唐より[illegible] [illegible] 定恵ハ淡海公の兄なり 廟の左

たとひ〳〵て皆倍塔なり磐山の東より女
武の峯と出て北へ出て北へわかれ八町
余ゆく是より葉までの人ハ激しくに女高山
のかたれ谷道を渉くゆくるの傍よ村を文
し文武の峯より五十町ゆけれ女武の峯
はいるの所より今ハ高る道なし是より女
武の峯に入て每町よ石表をたて町数を
刻む高家の後より桜井北に出と十六町余く

倉橋村　是用明帝崇峻帝の葬れし地なり
陵あり
外山村　此の東より長谷須坂村より出
長髄彦の後しなと云り日本紀神武紀に云金
鵄ハ是邑の名を号なりよて人の名と為る鵄
の瑞ある依て時の人とび村と号もとに之
を是より桜の方山あるにたちさ宇をへ行
る迄十町余にて忍坂村あるそれより二千

町作りて塩坂と云坂あり是寺多き所
なるより是より東八寺多き也寺の八幡中し
なり町なと
長門(ながと)村　小山のやうりと手打の是関所て道北
報恩寺の引摂(ひきつき)の寺と云し所なり是よ
り六役の文殊遊し文殊堂にも村なと是
と文字の居なりし所なり桜井より南六
七町にあり

桜井の宿　奈良の京より是までて六十六町
なと一里半十二町なり町なと繁昌(はんじやう)し家人なと
毎月六度の市立所あり民家軒(のき)
つゞきより八本今井吉野也高麻高谷に接
旅人乃など通衢なり宿屋(やどや)なとあし旅宿家
く止宿とる所也桜井を出て初瀬へ向け八
丁の桜市の地なと初瀬や村より宿町作し东
なりて出跡等寺と云ふ所なり茂

佐井ら氏渡る

人丸墓　歌塚とも云又人丸の墓ハ奈良より一里余東櫟本と云所にもあり

磯城嶋　桜井三輪の方より初瀬へゆけハ慈恩寺村より先にあたり爰に芝村あり是なき嶋の跡なり南に続きて同村あり宮を北と云是欽明天皇の都金刺の宮の跡なり又林村と云も金刺の宮の跡ハ何れもしらず竹林寺也

三角に小社ありと云當世ハ田畠に来て安穏の名ありと云

高圓山　三輪の瀧より龍の宮に至る之名

初瀬　迦瀬とも書又長谷とも云此地三輪に至る先ハ山洞水と乗んて谷中をさかのぼりて長谷と云なるべし隠口の初瀬と云是山の口にかくれてありてしかく名れハいふなるべし桜井より是まで一里半程林森の町民屋

なし也昔ハ元正天皇の時に創立
天武天皇の御宇道明上人是を造立すと
も云なり堂ハ八棟作り十一面の観音高さ二丈
六尺也二王門ハ南に向たり楼もとに上りて
て見ば左右の長廊ありて其廊下に石階
段あり其上に本堂あり東へ続く是
此へ上る上に僧坊多く学寮多しと
又百八十内小池と百人六坊二百人其余の学侶

集まる所也小池坊むかしハ紀州根来寺に
ありしに天正十三年秀吉公根来を破
却の後ち僧徒国々に流浪し知積院ハ京
都ちを立小池坊ハ此地にちを立て今に是
存すと又此山上の表に桜色かへる初
瀬山秋冬ハ紅葉甚うるはし諸方騒人
の多く此記造ほとり所也向よ小さき
山あり八塩の岡と云 長谷寺門より

二本の杉あり古川辺をいへり
笠荒神（かさのくわうじん）　古市より一里ばかり山のおくへなり
霊験（れいげん）あらたなる山　竹林あまたあり若宮長三荒の笠を
てらす俗説なり
是より坂を経て三輪
三輪ヶ崎　三輪山の東の尾さきをすぐ佐野渡
も泊瀬河と云なり
三輪　初瀬より一里半　社は北より南の方に向

拝殿とてあり社の前に三輪町あり是より
奈良道へも古市へも掛井寺も無し社に扉
堂はなし拝殿のうしろに山ありて杉
多し氏子の人是に向て拝めば大なる
菩薩也社の前大御輪寺と云ふ寺
あり山の小神杉と檜原と云ふ又山のけよ
玄賓僧都の住し給ひし庵や三輪の
町に崇敬（さうけい）を受くる所の庵室あり

穴師(あなし)山　是向(むく)山とも云或曰穴師山と是向山と
八二也ならびて在き山なりといふ穴師山のことは
十市(とをち)常陸か城市とれとは山ハ三輪より丹波
市ふゆけ八たにあなる山なり又湯嶽(だけ)ありだ
けあは穴師の里また是より向の珠珠(たまたま)の文字に
市此頃これは也まる緒環(をだまき)塚あり岩田村乃
おかしろにて是向川ありにまも在り
箸(はし)の御墓　大后の名此代なる小山なる墓申

村よ左荒神帝に在む倭迹(やまと)と百襲(もゝそ)姫(ひめ)命(みこと)
と死(かく)れし葬(はうぶ)り是日本紀に崇神天皇紀よりしるしたり
柳本村　所なる柳本と丹波市の間なる大和(やまと)大和村
あり二千二社の内なり
釜口にあり山号ハ長岳山と云弘法大師の開基也
中山に在り　聖徳太子建立にて十一面観音なり
山辺郡
丹波市　三輪より二里半柳本より一里八町ほど
しへの海柘榴(つば)市ハ丹波市なるにてよくく三輪の在所

よりくまほし所につく事とうくさ我ならに
つゞ市たんじ市あり　あらかし所　旅籠の
止宿する輩凡吉野までの大道
連多くしてにぎはし

内山　丹波市と石上の間大なり　東へ山ぎ
その里之永久寺とて真言流の創立し給ふ
寺にて丙からや古行基附と云僧覚鑁
上人弟子の滅を落てここに入衛し給ふ大

塔又の隠れ給ひし跡ここなり

紀有常の宅のあと　石上町より豊田町ちかく
別所と云村あり　永承のころは中にて常人
とよぶ井の跡今に残れり　今井筒の井　文
今側に横わる木あり

石上　丹波市より一里ばかり　あるいは弓に八坂の

布留　石上の東北山にそひて里　里の名や名所
せおふなる事ある里に布留大明神の社あり

石上より六七町上に善性法師と云よ従めり
上原寺 石上の少し東の方に傍法寺
古墓 上
桃の尾の滝 布留より小山に上て布留の滝
ともいふ 竜門之上山のくまに龍福寺あり義淵
僧正の開基なり内山 布留桃の尾いつれも
たきあり くらんに東にあり三年八月してきゆ
おひたたし此滝ハ石の上にあり

菩提山 僧坊多し 大なる一里ほと東の
山の中なり久保さの庄にて正暦寺
ありたちちかし
奈良 平城とも寧楽とも書今の本郷に対
して南都とも云元明天皇より桓武天皇まて
七代此所に都し給ふ今の町にハあらす昔の
都の跡ハ奥へ行て二条村より右に都
あり今の町にて冊波布より三里余の町広し

此邊は商人多くして不足て勝れたる也此地の名産
八刀　剃刀　小刀　酒　晒布　團扇
法論味噌　燈籠　風爐　雪を下すや　今ハ南の京にも云　饅頭
草履是也　奈良晒と云者廣く諸國へ渡りて[illegible]
ぢうの饅頭ハ宋を傳来て此地にて初て作ると云
其後は京都諸方に遍く作りあるひし也初て
作りし者なるとも此地に饅頭多く作る又
此地の民つねに茶粥を食ふと云其他[illegible]より

容易也て神ハ[illegible]ことに行せしくあるひて
たかくべきさらに薦を蒐きをいて是をねらう又大
行せ[illegible]志ぶさてなくへよりもまく大和國中
晒かくれたとし布ハ國中より織いだしを南
地般ゟのるをしい又ハ菅原村のをのまち川田と云
所にて多くさらし是也
般ゟのる　聖武帝の四年剣也[illegible]八文殊
也大安寺の縁起此邊にありし菩提[illegible]

般若寺坂　佐保川の水也此寺ハ山十八丁にて般若経
人の居ありたれ侍に實石多し是を喉虎を
歌人ども是を葉のうてと云
奈良坂　般若寺の北にあり是東都水の道也一
段に今れ奈良坂ハ古あるにありたる坂の西
らに今奈良都の為にある日蓮の宗に見ゆ境の南
乃坂古の奈良坂也ことを今ハ坂と云是古に
不滑なる坂也此所ハ来る古へ坂場を行臣と

椋境也築境のしるり今れ般若寺の北れ
坂と西ゆるるハ古ハ境の所より柞の森林
也ると籔れ流を越し也奈良と本津との間に
大和山城の境也
山城相楽郡
木津　奈良より五町あり町より二町河水
に木津川と是泉川の下也大河也西へ
渡る此川と此川の源ハ是より十三里東へ
伊賀の國山田郡ゐより出る是伊

賀の流をてなり相楽郡をきさごへ至
へ出て之に流る伊賀国の水この川に
流るゝよりさ淀の大橋へ出る木津の東より
鹿背山と云所あり又岩田久尓の郷を
鹿背山のあたりへし今は狛の郷とも云人
なし恭仁之京も同じ所也布当も同所と河に水
に狛の里狛の三村あり又京都へ上狛也此所営
は瓶原の古言に瓶をあり今は瓶を

作られ狛の里山城相楽郡之狛の渡は木津
河也又古言に三河泉とも云あり
さらに鹿背山を出るれ奈良坂へ至
至りに八木津へ川くだりして般若寺ややまと町に
至りに出て梅谷奈良より北の方一つ木山城の
山城の境なる高田村あたりとて賀茂へ出れば
あるし

賀茂　木津より二里余る賀茂に入る川

きこに至て里村といふ賀茂河の北にあり此河ハ
木津川の上泉川也茶屋ありて旅人の宿す
也川の北ハ瓶原也賀茂より笠置へ二里也
是より笠置まて皆山城國相楽の郡也
鉄司 川の北にあり笠村より薪なとを此所
へ出し川舟にて淀伏見へくる是より淀まて
舟路七里有此所橋多し北ハ山なり南ハ高
なる里まてあまりなる所橋多く有之

小屋村 川の北鉄司より十町許河上也
是島式渡 泉川の所より之南より北へ舟
まて渡る是より笠置へ十二町有之
桐山村 山の中腹にて南をうけたり広き所
也竜燈多し
小笠置 人家多くして寺院なり南笠置とハ
河をへたつ川是より南へ十三里余木津迄へ四
里柳生へ一里大川原へ一里半 又大川原ハ伊賀の国路之大路也

てくらがり峠越 奈良へ出る 加茂谷をとほり 笠置の
寺をへて 大川筋より 伊賀へ出 伊賀上野 山田より
又笠置越 瓦川 舟渡し 笠置寺より川を下て へ八
つもりなり
よられは奈良へ出る笠置の宿 此村より来 笠置の
の物を笠置へ持参 大伊賀より来 大きな笠置
寺にて舟にて出し 川舟にて 淀伏見へ下れ
笠置寺の坂より舟にて これは安山此岩屋よ
し 此の方に岩窟あり むかしの
寺 笠置寺 小笠置寺より舟にて渡る人多し

く安倍よりは岩船八川むかひよりて法米の
るむ谷にあらんやう笠置寺をゆきて八所
の坂と云る峠所 右は寺とて笠置寺にて東大
寺の又坊あり 今に坊八ヶ所となり二坊
よ修行あり 修行を本尊 泉州大名より寄進
十三重塔 薬師石 文殊石 弥勒石 二重宮 虚空蔵
石なとゝいふなり 昔は二十六坊八九坊の大石に
仏像を彫て諸堂ありしが 其時石もやけ

て今ハ佛像もなし霊宝類のミ今に
佛像并に本堂ニ門あり往古ハ大伽藍二
十ヶ院もありしとかや当山大塔宮のこと
を解脱上人穿堀して解脱自筆の縁起
一巻を縁起一軸埋木経筒を掘出して解脱の
發起にて当の寺仏山王に埋木縁起の縁にて
或ハ宮の御手大塔宮子或時此山に入て
麻を結ひ狩に鹿を暴れに逢ふてまろひ霊

宝類出現してより雅をまさりける白子
坂ひとも此のまるして器をねこそし雨毛太刀
に曽至をとを嫁を天山に麻を多く岩に蛇
あり是れに麻路山と云もとも是よ
脱誤て宮の旧址ハ孫勘兵衛のよ先山より北丸
二の丸の跡を甚だ険し足助三郎重光と聞
よろし西ハ高木の坂せんに生駒山 清ん山ハ北
北谷より荻原をしとも云道より東山に落帯

大川原なといふ村目の下に見え飛鳥路村々西
柳生谷ハ笠置の東南にあたる山谷の内也東ハ白
山の東三里ばかりにあり大柳生小柳生とて
二所あり昔ハ柳生氏ハ小柳生に住居せり
川ハ飛鳥路と南笠置の方に流れ出川
○是より東に海ある所をとへば笠置より川
にそうて賀茂へ出り西へ川の北に流る
瓶原 奈良之大村あり山村の西より木津

の境までを泉川といふ三ケ日原の北山を瓶
鹿山といふちかく東に見ゆ三ケ日原の千石許
下川南に猶蕨村也瓶原の内也今世ハ村
となる是より木津へ半日猶蕨村の
北は川をさら鎌懸の山路を経て南に二千
餘町にして笠置ちか村にある此路を上
ちかき也木津への路八升ありゆかれ
して泉川のをとをきりや

槙嶋村　荒見の社并子守明神の
古跡なく此地を小倉堤といふや
平尾村　玉庵ある子弘法大師作の辯才天一体
十六ケ古跡の像あり
綺田村　蟹満寺あり本尊釈迦ハ坐長云丈
作や此もの事ハ元亨釈書にのせられたるを旅
人ものよ遠くしる也皆山城國綴喜郡なり
宇治　橋より東奥山よりハ宇治郷

や橋より西茶師の居住せる所ハ久世郡や
平等院　朝日山と号す宇治関白頼通公ハ別業
左大臣源融公の別荘や寺の跡つあるる比
義ハ本堂ハ後の鳳凰堂の東にあるとよ
いにしへの宝物の絵ある或云宇治実頼の宅
のあと也扉の絵あり是三井寺の絵と一双
や新羅より来る凡此鐘の経文新世この鐘
よまるへしと云しる物ハ其云ふるや宇毎鐘云

宗となる

槙(まき)の嶋　宇治の西北川の西之嶋ハ宇治の河嶋也今ハ陸(くが)につゞき布を多く晒をほす之

宇治橋　孝徳(かうとく)天皇大化(たいくわ)二年釋(しやく)道昭(だうせう)始てこ橋を作る橋姫の社ハ橋の西のつめに在[illegible]今ハ橋の東北住吉を彼方(をちかた)所ハ橋の東山の岸の瀬ハ今とを文にれ或云宇治橋の川下是也かきつく橘(たちばな)の小嶋か崎ハ橋より下ニ有

よりむかふ勢多(こころ)より流て今ハむかし此の橋十三重の石塔ハ中の嶋ニ在り思叡尊上人殺生を禁し網代(あじろ)をやめさせらるゝ事をとゞめしゝ給也宇治橋ハ東西ニかゝれり宇治川の西ニの岸とも云ハあやまれり

恵心院　具[illegible]まるの西ニあり恵心僧都の住せし所也

興聖寺(こうしやうじ)　宇治郡(かうけ)曹洞(さうとう)宗也[illegible]

流宗に至て久しく家ち絶しを永井信斎法
の盛なりし時此池に再興せられ皆此流
利休流より宗治派をもらひ最後系之茶系
統の右ノ川なこそにある小庵を欽流亭と云
寺の石ゐく茶利休の茶に茶師寺ともい宗
治の此此処にて瀧船の社の寺川好む者こ
れを立まよへし 大風ち村宗治此茶
村にあり此あり家葭を以し茶を多く

うゆり所之三宅戸八興屋与ゟの小山谷の内十
町許よみく欽流亭行り此れの祖ゟ正之
茶藏の山茶猿ヶ 又ケ岸子立庵僧隠元
和尚永庵の法弟なれ大如鑑也開山者また
隠元像を又霊亭もち隠元和尚遺墨のこ
よ六角丸小亭ども立てり 信及茶の妻院は
本庵和尚隠る座所え 本庵像まもと石基
のもとに亭を立より双鶴亭などいへるの後れ

ちうき本にあり浄元所荘といふ所に唯一上人住
めり又華厳経を血書され唯一の本像ある門
外に獅子林海眼院あり稱讃和尚浄土宗
也門内に鐘のかくれ子院多し器物多く一
切経は板也あり紙に摩出し下の黄檗山
の鉄眼によりて西方ちらして所縁此堂を給
に孫陀二郎と云世の隠の二郎とも云ける
者の綱によりて所の仏前あり和懐村

に御大明神の社あり
桂川の橋　浮田川　本妙寺　本薬山　長の寺
盛岩は言よりあり臭楽寺亀谷とのわれ
八尾鳴岳のうへに古寺の跡ありといふ
唐僧高泉禅師の名を佛国寺といふ
日野法界寺　称大明神より十禅師良の寺
より伝教大師の開基今は真言宗也日野
大納言殿の屋敷のあとといふ平家の亡に衛

の妻死にける後その山のふもとに鴨の長明すみ
ける方丈の跡あり
六地蔵　地蔵堂あり浄土宗也むかし小野篁か
納て入し所なり地蔵六体を作て此所に安置せ
し故六地蔵と云後に平清盛分て洛外六
所にあまねくする此地蔵一なり
元禄九年上元日
貝原篤信記

文 31